

【原著】

大学進学希望者の高校生が選好する評価方法とは？

——「入学者受入れ方針」を検討する上での一視点——

西郡大（佐賀大学アドミッションセンター）

倉元直樹（東北大学高等教育開発推進センター）

大学入試における選抜性の総体的な低下に伴い、入試によって入学者の学力水準を担保することは困難となりつつある。そのため、各大学は高等学校段階での学習成果を適切に評価することが求められている(中教審,2008)。本研究では、大学進学を志望する高校生の大学入試に対する受け止め方に注目し、「主要教科を中心とした基礎的な学力を評価するペーパーテスト」と「ペーパーテスト以外の評価方法」を主軸に、それぞれの評価方法が選好される要因は何なのか、また、その要因はどのような属性による影響を受けているのかを検討した。その結果、「入学者受入れの方針」において、「何をどの程度学んできて欲しいか」を議論する上での1つの切り口になる可能性が示唆された。

1 はじめに

高等教育機関への進学率の上昇、少子化に伴う18歳人口の減少、入学定員の拡大といった様々な要因により、大学入試における選抜機能は、一部の大学を除いて総じて低下した。これは、一定の選抜機能を全体的に有していた時代と比べ、入試によって入学者の学力水準を担保することが困難になってきたことを意味する。

こうした点は、平成20年12月24日に中央教育審議会によって答申された「学士課程教育の構築に向けて」でも問題視され、学士課程教育の改革に向けた3つの柱の1つとして「入学者受入れの方針」が挙げられた¹⁾。

同方針では、高等学校段階における学習成果の適切な評価に向けた指針が示され、具体的な改善方策として、「大学に期待される取組」(7項目)が挙げられている²⁾。これらの項目に通底しているの

は、各大学における入学者受入れの方針に基づく適切な評価の推進であるとみることができる。そのため、今以上に入学者受入れ方針に関する十分な議論とその方針に基づいた受験生に求める資質を評価するための方法の模索が求められている。しかしながら、どんなに崇高な理念や受入方針に基づく評価方法でも、受験者によって受け容れられなければ、長期的に維持できないのが現実的とも言える。

そこで本研究では、大学入試において実際に実施されている評価方法に関して、大学進学を目指す高校生がどのように捉え、誰がどのように評価されることを選好しているのかに注目した。特に、長い間大学入試の主軸であり続けた高校の授業で学習する「主要教科(英・数・国・地歴公民)を中心とした基礎的な学力を評価するペーパーテスト」(以降、「ペーパーテスト」と表記)とそれに代

わる軸として文部科学省によって推進されてきた「選抜方法の多様化, 評価尺度の多元化」に基づくペーパーテスト以外の評価方法(以降, 「非ペーパーテスト」と表記)を分析の中軸に据え, それぞれの評価方法が選好される要因は何か, また, それらの要因は, どのような属性によって影響を受けているのかについて検討した。

2 方法

2.1 調査概要

東北, 東海地域における 10 校の高等学校 2 年生を対象に, 「高校生の大学入試に関する受け止め方の調査」を行った。調査協力に関しては, 筆者らと交流のある進路指導教員を通じて依頼した。調査校は, 各地域における進学校であり, 多くの生徒が大学進学を志望する高校である。調査時期は, 受験生としての意識が芽生え始めると考えられる年度末(2008 年 3 月頃)に行った。

調査票は, 無記名実施かつプライバシーを保護することを明記しており, 個人属性に関しては, 「性別」「クラス(文理別)」「部活動」「将来の目標有無」「志望大学種別(国公私短大別)」「志望学部種別(学部系統別)」を尋ねた。それ以外は, 5 件法からなる項目群の 9 セクションで構成され(一部, 自由記述を含む), 高校生活を通して得られた認識(具体的には, 主要教科の学習, 部活動, 生徒活動などに対して, どのような意義を認めているか), 大学入学後に期待すること, 大学入試制度, 選抜方法, 評価方法等に関する知識および認識について尋ねた。

全回答者は 2,752 名であった。高校別の内訳は, 311 名, 308 名, 264 名, 260 名, 304 名, 246 名, 288 名, 237 名, 344 名, 190 名であった。なお, 本研究では, 大学進学

を目指す生徒層という点において各高校に大きな差はないものと仮定し, 調査への回答に高校の違いが影響しないと考えた。これらの回答から, 全ての項目に欠損値のない 2,611 名の回答を分析対象とした。

2.2 分析方法

まず, これまでの高校生活を通して得られた認識, 大学入学後に期待すること, 大学入試制度に関する知識および認識, 選抜方法, 評価手続きに関する認識を尋ねた項目について因子分析を行い, 「ペーパーテスト」および「非ペーパーテスト」の選好に影響を与える要因として考えられる因子を抽出した。次に, これらの因子を独立変数, 「ペーパーテスト選好」および「非ペーパーテスト選好」を従属変数とし, 尺度得点を用いた重回帰分析を行い, どのような要因が従属変数に影響を与えているのかを検討した。最後に, 高校生が期待する評価方法を規定する各要因について回答者の属性別に検討し, それぞれの特徴を整理した。

3 結果

表 1 に, 回答者属性の内訳を示す。

表 1. 回答者の属性 ()内は%を表す

	男子	女子	-
性別	1418 (54.3)	1193 (45.7)	
文理別 クラス	文系 1044 (40.0)	理系 1428 (54.7)	未定 139 (5.3)
部活動	運動部 1389 (53.2)	文化部 817 (31.3)	無所属 405 (15.5)
将来目標	ある 1831 (70.1)	ない 308 (11.8)	分らない 472 (18.1)
志望大学 種別	国立 2229 (85.4)	私立 195 (7.5)	その他 187 (7.2)

大学進学希望者の高校生が選好する評価方法とは？

因子分析の結果は、「これまでの高校生活を通して得られた認識」(表 2), 「大学入学後に期待すること」(表 3), 「大学入試制度および選抜手続きに関する認識」(表 4)として示した³⁾。なお、各変数間の相関係数を表 5 に示す。

表2. これまでの高校生活を通して得られた認識(主因子法,プロマックス回転)

抽出因子および質問項目	I	II	共通性
I. 課外活動肯定観 ($\alpha = .53$)			
友達との付き合いは,勉強以上に大切だと思う	.57	-.20	.24
一般的に部活動や生徒会などの経験は大学入学後に役立つ	.55	-.12	.39
高校まで継続してきたことがあれば,それを大学生活でも活かしたい	.46	.08	.26
II. 受験勉強肯定観 ($\alpha = .43$)			
授業で学ぶ「主要教科(英・数・国・理・地歴公民)」は, 大学で勉強する上で重要である	-.06	.55	.28
受験のための努力は,大学入学後もきつと役に立つ	.08	.50	.30
受験が無ければ,授業で学ぶ「主要教科」に興味は無い(逆転項目)	-.08	.37	.11
因子寄与	1.04	.96	
累積寄与率(%)	19.9	26.4	
因子間相関	-	.53	

表3. 大学入学後に期待すること(主因子法,プロマックス回転)

抽出因子および質問項目	I	II	III	共通性
I. 学問・研究志向 ($\alpha = .76$)				
自分が興味ある分野の学問を追求できること	.76	-.04	-.07	.57
高校で学べなかった学問の面白さを発見すること	.75	-.01	.01	.52
知的好奇心を刺激してくれる先生との出会い	.63	.03	.03	.43
自分の興味や関心がある様々なことに挑戦できること	.57	.14	.03	.42
最先端の理論や技術の専門的な研究ができること	.50	-.08	-.03	.22
II. 大学生活エンジョイ志向 ($\alpha = .72$)				
束縛されてきたものから自由になること	-.14	.80	-.08	.54
保護者から独立して一人暮らしをすること	-.06	.60	.02	.35
部活動やサークル活動を楽しむこと	.03	.59	.00	.35
生涯の友人を得ること	.10	.53	.08	.39
本来の自分とは何なのかという「自分探し」	.15	.40	.06	.26
高校生活までとは違った形で大学生活を満喫したい	.03	.33	.02	.12
III. 就職準備志向 ($\alpha = .76$)				
就職に必要な情報や人脈を得ること	-.13	-.02	.88	.68
就職に役立つ自分の特技や能力を育ててくれること	.05	-.04	.75	.57
社会に出たときに役立つ知識や資格を身につけること	.13	.00	.59	.43
大学卒業時に就職口を紹介してくれること	-.05	.13	.49	.29
因子寄与	2.77	2.61	2.80	
累積寄与率(%)	24.7	34.4	40.9	
因子間相関	-	.31	.43	
		-	.46	

表4. 大学入試制度および選抜手続きに関する認識(主因子法,プロマックス回転)

抽出因子および質問項目	I	II	共通性
I. 均一的手続き選好度($\alpha = .58$)			
受験科目が極端に少ない入試で合格した人はずるいと思う	.58	.03	.33
同じ学部・学科の入試なら,全員が同じ科目を受験する方が公平だと思う	.56	.06	.29
同じ学部・学科に一般入試や推薦入学など異なる選抜方法が混在するのは不公平だ	.55	-.09	.34
II. 大学入試制度肯定観($\alpha = .52$)			
公平性が確保された試験制度だと思う	.05	.68	.45
現在の大学入試に不満がある(逆転項目)	-.13	.45	.25
大学生になる資質のある者を選抜するために必要である	.11	.42	.16
全ての選抜方法で適切な能力が判定されているか疑問である(逆転項目)	-.10	.29	.11
因子寄与	1.08	1.02	
累積寄与率(%)	17.9	27.6	
因子間相関	-	-.29	

表5. 各変数間の相関係数 (尺度得点を用いて算出)

	1	2	3	4	5	6	7	8
1. 課外活動肯定観	-							
2. 受験勉強肯定観	.25**	-						
3. 学問・研究志向	.24**	.35**	-					
4. 大学生活エンジョイ志向	.34**	.10**	.26**	-				
5. 就職準備志向	.23**	.11**	.33**	.39**	-			
6. 均一の手続き選好度	.02	-.06**	-.01	.15**	.08**	-		
7. 大学入試制度肯定観	.06**	.19**	.07**	.05**	.09**	-.18**	-	
8. ペーパーテスト選好	.09**	.31**	.21**	.11**	.15**	.04	.23**	-
9. 非ペーパーテスト選好	.31**	.13**	.18**	.22**	.18**	.06**	-.05**	.06**

** $p < .01$

次に,ステップワイズ法により重回帰分析を行った(表6)。従属変数である「ペーパーテスト選好」は,「学力試験(ペーパーテスト)によって,高校の授業で学ぶ『主要教科』を中心とした基礎的な学力を評価されたい」という1項目を用い,「非ペーパーテスト選好」は,「書類審査や面接試験によって,意欲や志望動機を評価されたい」「書類審査によって,高校の定期試験や課外活動などの成績が反映された調査書を評価されたい」

「面接試験によって,自分の人格や性格を評価されたい」「実技試験によって,特技(一芸)や運動能力を評価されたい」という4項目を用いた⁴⁾。

分析の結果,相対的に強い影響力を持つ要因は,「ペーパーテスト選好」において,「受験勉強肯定観」($\beta = .24$)と「大学入試制度肯定観」($\beta = .19$),「非ペーパーテスト選好」において,「課外活動肯定観」($\beta = .25$)であることが示された。

大学進学希望者の高校生が選好する評価方法とは？

表6.重回帰分析の結果(標準偏回帰係数)

	ペーパーテスト選好	非ペーパーテスト選好
	β	β
学問・研究志向	.091***	.086***
就職準備志向	.066**	.061**
大学生生活エンジョイ志向	—	.094***
受験勉強肯定観	.24***	—
課外活動肯定観	—	.25***
大学入試制度肯定観	.19***	-.08***
均一的手続き選好	.082***	—
自由度調整済み R^2	.15	.13

** $p < .01$ *** $p < .001$

—はステップワイズ法により当該変数が除去されたことを示す

重回帰分析で用いた独立変数である各要因を回答者の属性別に尺度得点の平均点(単純和における回答者の平均点)で比較した結果を表7に示す。本研究では、属性別の平均点の大小に興味の中心があるわけではないが、要因の平均値の大小を属性別の特徴としたため、 t

検定および分散分析により統計的に0.1%水準で有意になったもののみを抽出した⁵⁾。なお、属性における「学部系統別」は、志望学部種別に関する21項目の選択肢を8つにグループ化したものである(表8)。

表7. 属性別にみた各要因の特徴

因子名	属性	比較
学問・研究志向	文理別クラス	文系 < 理系
	志望大学種別	国立 > 私立
	学部系統別	グループ① < グループ②~⑧
	将来目標の有無	ある > わからない > ない
大学生生活エンジョイ志向	部活動	運動部 > 文化部 > 無所属
受験勉強肯定観	性別	男子 < 女子
	志望大学種別	国立 > 私立
	学部系統別	グループ⑤ > グループ①, ②, ⑦
	将来目標の有無	ある > わからない, ない
課外活動肯定観	部活動	運動部 > 文化部, 無所属
	学部系統別	グループ⑦ > グループ①~⑥, ⑧
	将来目標の有無	ある > わからない, ない
	均一の手続き選好	性別
	志望大学種別	国立 > 私立

表8. 志望学部種別のグループ化

学部系統グループ	学部系統分類
グループ①	法学, 経済, 商学系
グループ②	文学, 社会学, 教育学, 教員養成, 外国語, 家政, 生活科学系
グループ③	理学, 工学系
グループ④	農学, 獣医, 水産系
グループ⑤	医学, 歯学, 薬学系
グループ⑥	保健, 看護, 介護, 福祉系
グループ⑦	芸術, 体育系
グループ⑧	その他

4 考察

「ペーパーテスト選好」の規定要因として影響力を持つものの1つに「受験勉強肯定観」が挙げられることから、高校の授業で学ぶ主要教科を中心とする受験勉強を肯定する者には、ペーパーテストを選好する傾向がみられる。「受験勉強肯定観」は、「学問・研究志向」との相関がみられ($r=.35, p<.001$)、大学入学後に学問や研究を志向する者ほど、受験勉強を肯定していると解釈できる。

もう1つの影響力を持つ規定因である「大学入試制度肯定観」は、「学問・研究志向」($r=.07, p<.001$)や「受験勉強肯定観」($r=.19, p<.001$)との間に、顕著な相関関係は見られず、各要因との相互作用による影響というよりも、現在の大学入試制度そのものに対して肯定的に捉える者に、ペーパーテストを選好する傾向が見られた。なお、「ペーパーテストを中心とした学力偏重な試験制度である」という項目と本要因との間に相関関係は見られないことから、大学入試制度の肯定者、否定者を問わず、現在の大学入試がペーパーテストを中心とした学力偏重な試験制度であるとは認識されていないことが示された。

一方、「非ペーパーテスト選好」の規定要因として影響力を持つのは、「課外活動肯定観」であり、主要教科を中心とした高校の授業よりも部活や生徒会活動、友達付き合いといった活動に価値を置く者によって選好されている。また、「課外活動肯定観」は、「学問・研究志向」($r=.24, p<.001$)、「就職準備志向」($r=.23, p<.001$)「大学生活エンジョイ志向」($r=.34, p<.001$)といった大学入学後に期待する要因とも一定の関係を示しており、本要因が、入学後の期待と複雑に絡み合いながら、「非ペーパーテ

スト選好」に影響を与えていると解釈できる。

「ペーパーテスト選好」と「非ペーパーテスト選好」を規定する各要因について、回答者の属性別に検討した結果からは、次のような特徴が確認された。例えば、自分のクラスが文系クラスであるのか理系クラスであるか、志望する大学が国立大学であるのか私立大学であるのか、志望する学部は何なのか、さらには、高校生活において部活をしているか、していないか、運動部であるのか文化部であるのかといった様々な違いなど、「高校生活において何をやっているか」「自分が志望する大学および学部の性格をどのように考えるか」によって、大学入学後に期待することや高校生活における現状認識、そして、大学入試制度やその手続きに対する認識にも違いが生じることが示された⁶⁾。

こうした特徴は、各大学において選抜方法や評価方法を議論する際の具体的な視点となりうる。例えば、「志願倍率を上げることが優秀な学生確保に繋がる」ということを抛りどころにして、国立大学の理系学部において、入試科目の軽量化や学力検査(ペーパーテスト)を課さない選抜方法を通して志願者を確保しようとするならば、志願者心理について十分に留意しなければならない。というのも、国立大学志望の理系クラスでは、「学問・研究志向」が強く、「受験勉強肯定観」との相関も高いことから、入学後に専門的な学問や研究を行っていく上で基礎となるであろう高校で学ぶ主要教科の重要性を感じていることが予想され、志望校合格のために、高校3年生の年度末まで、しっかり勉強することを厭わない覚悟を持っている層だと考えることができるからである。そのた

め、上記で示したような選抜方法や評価方法へ舵が切られた場合、彼らが持つ入試に対する受け止め方に対して、葛藤をもたらすことは否定できない。となれば、高校の授業で学ぶべきことをしっかりと学んできて欲しいと期待する大学にとっては、本末転倒な結果となりかねないのである。つまり、志願者の背景やそれぞれの入試に対する受け止め方を考慮しない方向で、志願者確保のみが目的化していくと、結果的に、大学にとって本当に欲しい人材から敬遠される可能性すら持つのである。特に、学問および研究等を志向する大学では十分に配慮する点ではなからうか。

5 結語

冒頭で示した「大学に期待される取組」の全7項目のうちの1項目は「大学と受験生とのマッチングの観点から、入学者受入れの方針を明確化する」というものであり、受験生に対して「何をどの程度学んできてほしいか」を明示することが求められている。大学入試の選抜性は低下したとはいえ、その影響力は未だ大きいことは言うまでもない。当然、大学入試(特に、「入学者受入れ方針」)を通して大学側が発信するメッセージも大きな意味を持つだろう。その意味において、受験生から本質的に理解されるためのメッセージを発信するための切り口として、本研究で示したような知見が活用されることを期待したい。

注

- 1) その他の2つの方針は、「学位授与の方針」、「教育課程編成・実施の方針」である。
- 2) 具体的な改善策は、「大学に期待される取組」と「国によって行われるべ

き支援・取組」に分けられる。

- 3) 因子分析および重回帰分析の具体的な手順については紙幅が限られるために省略し、分析結果のみを示した。
- 4) 因子分析により、これらの項目の1因子性は確認されており、4項目の和得点で算出している。
- 5) 検定を繰り返すことで、タイプIのエラーが発生しやすくなることを考慮し、有意水準を0.1%とした。
- 6) 西郡・倉元(2007)は、大学入試の場面では、自己利益の最大化するように動機付けられる「利己モデル」が適用されやすいことを指摘しており、本分析でも同様の傾向が確認されたとみることができる。

引用文献

- 中央教育審議会 (2008). 「学士課程教育の構築に向けて(答申)」.
- 西郡大・倉元直樹 (2007). 「日本の大学入試をめぐる社会心理学的公正研究の試み-『AO入試』に関する分析-」『日本テスト学会誌』3, 147-160.